

「虎の威を借る狐」漢文（故事成語）の 現代語訳・書き下し文と意味

「虎の威を借る狐」解説

「虎の威を借る狐」の意味

「虎の威を借る狐」は、日本でもよく使われている「ことわざ」だよね。
意味としては、「ほかの人の権力を盾にして、いばること」だね。

たとえばドラ○もんで言えば、ガキ大将のジャ○アンに珍しいオモチャをプレゼントして取り入
っておいて、ジャ○アンの権力を後ろ盾にしていばっているスネ○のような状態だね。

「ほかの人の権力を盾にしていばっている人」という意味で「虎の威を借る狐」、
「ほかの人の権力を縦にしていばる」ことを「虎の威を借る」というように使ったりするよ。

「虎の威を借る狐」の由来は？

「虎の威を借る狐」の話がでてくるのは、中国の「戦国策」という本。

前漢の学者である「劉向（りゅうきょう）」という人が、中国の戦国時代に国々で制作や策略を
説いてまわった遊説家のことばや行動を国別に集めて、編纂した書物なんだ。全部で三十三巻か
ら成るよ。

なんと「戦国時代」という名前はこの本が由来なんだって。

戦国時代の中国にあった「楚」という国のある大臣が外国から恐れられているという噂を聞いた
王様が、家来に「どうしてあの大臣がそんなに恐れられているんだ？」と聞いたところ、「大臣
が恐れられているのは、王様の軍隊が後ろにあるから」ということを説明するために、この「虎
の威を借る狐」のエピソードを話したと言われているよ。



「虎の威を借る狐」白文

借虎威

虎求百獸而食之。得狐。狐曰、

「子無敢食我也。天帝使我長百獸。今、子食我、是逆天帝命也。子以我為不信、吾為子先行。子隨我後觀。百獸之見我、而敢不走乎。」

虎以為然。故遂與之行。獸見之皆走。虎不知獸畏己而走也。以為畏狐也。

語句	意味
子	あなた
百獸	ありとあらゆる獸
天帝	天の神様
走	逃げる

「虎の威を借る狐」訓読文

借^ル虎^ノ威^ヲ

虎^ニ求^メ百^ク獸^ヲ而^シ食^ス之^ヲ。得^テ狐^ヲ。狐^曰、

「子^ニ無^ク敢^ヘ食^フ我^ヲ也。天^帝使^シ我^ヲ長^ク百^ク獸^ヲ。今[、]子^ニ食^フ我^ヲ、是^レ逆^シ天^帝命^ニ也。子^ニ以^テ我^ヲ為^シ不^レ信^ト、吾^ニ為^シ子^ノ先^ニ行^ク。子^ニ隨^ヒ我^ガ後^ニ觀^ム。百^ク獸^ノ之^レ見^テ我^ヲ、而^シ敢^ヘ不^レ走^ラ乎^ト。」

虎^ニ以^テ為^ス然^リ。故^ニ遂^ニ與^ヒ之^レ行^ク。獸^ノ見^テ之^ヲ皆^ク走^ル。虎^ニ不^レ知^ル獸^ノ畏^レ己^ヲ而^シ走^ル也。以^テ為^シ畏^レ狐^ヲ也。



「虎の威を借る狐」書き下し文

虎百獣を求めて之（これ）を食らふ。狐（きつね）を得たり。

狐曰（い）はく、「子（し）敢（あ）へて我を食らふこと無かれ。

天帝我をして百獣に長たら使（し）む。

今、子我を食らはば、是（こ）れ天帝の命に逆らふ也（なり）。

子我を以（もつ）て信なら不（ず）と為さば、吾（われ）子の為（ため）に先行せん。

子我が後に随（したが）ひて観（み）よ。

百獣之（の）我を見て、敢へて走ら不（ざ）らん乎（や）。」と。

虎以て然（しか）りと為（な）す。

故に遂（つひ）に之（これ）与（と）行く。

獣之を見て皆走る。

虎獣の己を畏（おそ）れて走るを知ら不（ざ）る也（なり）。以つて狐を畏ると為す也（なり）。



「虎の威を借る狐」現代語訳

虎が獣たちを探し求めて食べていたが、ある時に狐をつかまえた。

その狐が言うには、「あなたは決して私を食べてはいけません。

天帝が私を（すべての）獣たちの王にしたのです。

もしいまあなたが私を食べるならば、それは天帝の命令に逆らうことになるのです。

あなたが私のことを信用できないと思うならば、私はあなたのために前に立って歩きましょう。あなたは私の後ろについてきて、その様子をご覧ください。

すべての獣が私を見て、どうして逃げないことがありますでしょうか、いや、必ず逃げます。」と。虎は狐の言うことをもっともだと納得した。

そこでそのまま狐と一緒に歩くことになった。

獣たちは虎と狐と一緒に歩いているのを見てみんな逃げた。

虎は獣たちが自分（虎）を怖れて逃げたということに気がつかなかった。虎は獣たちが狐を怖れているのだと思ったのである。

「虎の威を借る狐」内容と文法のポイント

「虎の威を借る狐」の定期テストで必要となる知識や、ポイントとなる内容、重要な文法（句形）について紹介するよ。

重要な句形「無敢」

これは「敢へて～無かれ」という書き下し文になり、「決して～してはいけない」という禁止の句形になるよ。

「虎の威を借る狐」では、「決して私（狐）を食べてはいけない」という意味で使われているね。



重要な句形「使AB」

これは「AをしてB（せ）しむ」という書き下し文になり、「AにBさせる」という使役の句形となるよ。

「虎の威を借る狐」では、「（天帝が）私（狐）を獣たちの王にした」という意味になっているね。

「使役」は「～させる」という意味でよくテストに出題されるので注意しておこう！

重要な句形「今～」

これは「今～ならば」という書き下し文になり、「もし～ならば」という仮定の句形となるよ。

「虎の威を借る狐」では「もし今あなた（虎）が私（狐）を食べるならば」という使い方がされているね。

重要な句形「敢不～乎」

これは「敢へて～ざらんや」という書き下し文になり、「どうして～しないことがあるでしょうか、いや、～します」という否定の反語となるよ。

置字

「虎求百獸而食之」・「而敢不走乎」・「虎不知獸畏己而走也」

ここで使用されている「而（ジ）」は読むことはないけれど、接続として使用される言葉だね。

「而」の直前に読む語の送り仮名が「～て、～して」と読む場合は順接として使うよ。

「虎求百獸而食之」は、「虎百獸を求めて」（而）「之を食らう」なので、順接だね。

「而敢不走乎」も「敢えて」（而）「走らざらんやと」なので順接。

「虎不知獸畏己而走也」も「虎獸の己を畏れて」（而）「走るを知らざるなり」なので順接だね。

「而」の直前に読む語の送り仮名が「～ども」と読む場合は逆接として使うんだ。



訓読で注意する語「之」

本文中には3回「之」が出てくるね。
それぞれが何を指すのかを整理しておきましょう。

1つ目の「虎求百獸而食之」の「之」は「獸（百獸）」のこと。「これ」と読むよ。「百獸」とは、「あらゆる獸」のことだよ。虎が百獸を求めて、これ（百獸）を食べるという意味で使われているよ。

2つ目の「百獸之見我」の「之」は「の」と読むので注意しよう。漢文の「之」は、「これ」という使い方の他にも、「～の」や、「ゆく（行く）」という使い方をすることもあるんだ。「百獸之見我」の「之」は、「百獸の我を見て」つまり、「百獸が私をみて」という意味でつかわれているよ。

3つ目の「故遂与之行」の「之」は「狐」のこと。「これ」と読むよ。「故に遂にこれと行く」の「これ」は、狐に「自分の後ろからついて来て観るように」と言われた虎が、「これ（狐）」と一緒にいった、という意味で使われているよ。

4つ目の「獸見之皆走」の「之」は「狐と虎」のことだね。やっぱり「これ」と読むよ。「獸これを見て皆走る」つまり、「獸達がこれ（狐と虎）を見て、みんな走って逃げた」という意味で使われているね。

訓読で注意する語「以A為B」と「以為」

「子以我為不信」で使われている「以我為不信」。これは「Aを以ってBと為す」という書き下し文になり、「AをBと思う」という意味になるよ。

「我を以って不信と為す」なので、「私（狐）のことを信用できないと思うならば」という使い方がされているね。

この「以A為B」は漢文において重要な語法としてよく出てくるので、しっかり覚えておこう！

「虎以為然」で使われている「以為～」は、「思うことには～と」という意味で使われるんだ。「虎が然りと思った」ということだね。つまり、「虎が狐の言うこと（信じられないなら、後ろからついて来て観てみればよい）が、然り（当然だ）と思った」ということ。

ここでは、「以て然りと為す」と読むけれど、「以為～」は、「おもへラク～ト」という読むこともあるので注意しよう。



訓読で注意する語「故遂与之行」の「与」

これは「～と」と訳す言葉だよ。日本語ではなかなか「与」を「と」と読むことは無いので、注意がひつようだね。

「之（狐）」と共に虎が行動するという意味になるね。
ここでの「～と」の役割を押さえておこうね。

虎以為然の「然」

これは「然（しか）り」という読み方で、「もっともだ」という意味になるよ。

ここでは狐が言った内容である「狐は百獣の長であり、すべての獣は狐を怖れる。それを証明するために狐が虎に先行して一緒に行く」ということについて虎が「もっともだ」と納得した、ということだね。

「見」と「観」の違い

「虎の威を借る狐」では、「見る」と「観る」がそれぞれ使い分けられているね。

「見る」と「観る」は基本的にはどちらも目で見ることだけれど、「見る」はただ目にするのに比べて、「観る」は「観察」ということばでも使われるように、様子を注意して探ったりするというニュアンスがあるんだ。

狐が虎に対して言った「自分が先に行くので後ろから観よ」の「観よ」は、どんなことが起こるのか、注意して観てほしいという意味が込められているんだね。

